

戦中・戦後と

足柄下郡支部 杉浦 徳子（妻）

戦没者 後田 操

戦没地 ビルマ

〈戦時中〉

台湾南部の海軍航空廠の近くに住んで居た折に台湾沖海戦が勃発、艦載機での爆撃や機銃掃射される日が何日も続いた。

やっと飛行機が去った後、我が家の前の通りを担架に乗せられ泣きわめきながら運ばれて行く人を大勢見ていたが、我が子に乳を飲まそうとしたが乳は出なかった。私自身相当恐かったのだろう。夜は何処から飛んでくるのか爆撃機が爆音を轟かせながら、そこら中に爆弾を落として行くという夜が続いた。

昼間は艦載機が飛んでくるので洗濯物は外へは干せないのです子持ちには酷だった。飛行場にはスリ鉢状の穴が大きく一列二列と等間隔にあいていた。住民はサイレンが鳴ると隣組単位でサトウキビ畑に避難して一夜を明かす繰り返しだった。キビ畑では野ネズミの被害にあったりもした。市内では特攻隊員で出撃前夜らしき人達が、大暴れしているのを父が見てきたりもした。戦史に

も載らない小さな小さな戦だったのか？

〈敗戦後〉

いよいよ引き揚げが始まると、中国兵士が港で身体検査は勿論、化粧品の中まで調べられ、やつと乗船したら輸送船の底、床にムシロが敷かれた所へ毛布一枚（四月）で底に何十人も入れられ、窓が無いので熱気で水蒸気が天井に溜まり顔の上にぼたぼたと水滴が落ちてきた。食事は二回だったと思う。イモとイモヅルと大麦の雑煮もどきものオワンに一杯、体調を崩す人も出ていた。

四日目でやつと田辺港へ上陸、それぞれの郷里へ向かっていった列車の中では、兵士が軍服、軍靴で、引揚げ者の小さな手荷物が置かれた列車の床を軍靴で踏みつけて去って行った。

何年か経ったら子供と二人だけになっていた。子供を高校、大学と進学させたら、女手一つでそんな事が出来るのかと近所の茶の間で話題になっていると聞き驚いた。私は木の間から生まれたのではないと叫びたかった。

今は五大家族、夫の戦隊の戦隊史が四冊出たので見せたところ、逢った事もない見た事もない祖父へ想いを寄せてくれている。

時代が移り変わり、もうおばあちゃんの知恵の出番はなくなってきた。

やれやれと気づいたら私の腰は曲がってきている。この後は御身ご大切に生きよう。

艦載機 おむつも干せず 乳もです

背の子と泣や 母は二十なり

はたち

としふれば 杖がたよりの ばばになり